

近代書籍交流史における上海と日本——張元済の日本訪書を中心に——

周 武

(閩 立 訳)

はじめに

近代の日中間では書籍の交流が盛んに行われていた。その中には不愉快なこともあれば美談もある<sup>(1)</sup>。近代上海は書籍の出版と流通の中心であったため、日本に輸入された漢籍の輸出元であり日本の文人が必ず訪れる場所でもあった。近代早期に日本に輸入された漢訳洋書はほとんど上海で購入されたものであった。漢籍は、近代後期でも相当数が上海より輸入されている。当時、日本の漢籍書店はほとんど上海から漢籍を輸入していた。ゆえに、近代の日中書籍交流史において上海は重要な役割を果たしていたと言える<sup>(2)</sup>。

近代上海と日本の書籍交流において一九二八年の張元済の日本訪書は重要な内容とされている<sup>(3)</sup>。これについてはすでに研究されているが、資料の関係上これまでの研究では張元済の日本訪書の内容が十分に紹介されてこなかった。近年、新しい資料の公開に従って、張元済の訪書の過程およびその重要性が明らかになってきている<sup>(4)</sup>。

本論文はこれらの資料に基づいて、張元済の日本訪書の過程およびその後の古籍撮影をめぐる交渉を改めて整理し、近代日中書籍交流の意義を考察するものである。具体的に下記の三点について論述したい。

一点目…張元済の日本訪書の過程

二点目…古籍の借用と撮影および日本人との友情  
三点目…張元済の日本訪書の意義

## 一 張元済の日本訪書の過程

### (1) 張元済について

張元済（一八六七年～一九五九年、字は筱齋、号は菊生、浙江海塩人）は一八九二年に科挙の進士試験に合格し、翰林になった。一八九八年に戊戌変法に関わったため、「免官の上永久に任用しない」との処罰を被った。その後、上海の南洋公学（現在の上海交通大学）の訳書院の院長となった。一九〇二年に商務印書館に入り、商務印書館の編訳所所長などを経て、一九二六年に理事長となった。張元済は長期にわたって商務印書館を主宰し、それを単なる印刷屋から編集、翻訳、印刷、発行、販売が一体となった中国最大の出版社に発展させた。商務印書館はかつて「東方文化の中心機関」と呼ばれていた。

張元済は中国で有名な出版家であっただけではなく、近代中国有数の版本目錄学の大師でもあった。<sup>5)</sup> 彼の手を経て編集、校正、影印された古籍は四〇種類もあるが、その中で最も労力を投じ高い評価を得たのは『四部叢刊』、『続古

逸叢書』、『百衲本二十四史』であった。彼は「書籍の最初の版本が最も貴い」と主張し、以上のような大型の古籍の叢書を編集する際、国内と海外で全力を挙げて最初の版本と善本を求めていた。一九二八年に日本で訪書した目的はそのためであった。

アヘン戦争以後、戦火が広がり、公私の蔵書は灰燼に帰し、多数の珍本が戦乱で紛失していた。一方、西学東漸の影響で中国では西洋を慕う風潮が日増しに強くなって、古籍に対する関心が集まらなくなっていった。そこで古籍を保護する運動を引き起こし、張元済は全力で古籍を守っていた。

一九〇六年の春、中国四大蔵書楼の一つであった甬宋楼<sup>ろう</sup>の所有者である陸樹藩は、義和団事件（一九〇〇年）で難民救助に資産を使い尽くしたので、甬宋楼を一〇万銀元で売却しようとした。日本の書誌学者であった島田翰はこれのことを知り、何度も甬宋楼に足を運んだ。張元済はこれを聞き、急いで買主を探しながら日本人に売却しないように陸樹藩に頼んだ。ようやく購入資金を一〇万銀元調達できたが、陸氏は一一万八〇〇〇銀元で三菱財閥の第二代総帥岩崎弥之助（号は静嘉堂）の静嘉堂文庫に売却してし

まった。甯宋樓藏書の喪失は長い間張元済の心を痛めた。

その後、彼は各地の藏書を売却する話を聞くやいなや直ちに交渉を行い、古籍の海外への流出を避けるために数知れぬ様々な苦勞をしていた。彼は友人の傅增湘への手紙に次のように書いた。

この時代に生きる私たちとしては、時勢に従って喪失しつつある我が国の数千年の文明を守るように尽力するしかない。古籍は一部でも多く残しておけば、それだけ文明の守りへの効力も大きくなる。我々に残っている時間は少ないので、努力してこの事業に努めなければならぬ。<sup>6)</sup>

張元済は古籍を守ることは自分の責任だと認識し、全力で古籍を守ることが中国の文明を守ることと同義になると考えていた。彼は自分の古籍収集の方法について「丐之藏家、求之坊肆、近走兩京、遠馳域外」というようにまとめた。

「丐之藏家」は直接藏書家のところから買い取る方法である。二〇世紀初期から張元済は有名な個人の藏書を買取りはじめた。紹興の徐氏熔経鑄史斎の藏書を全部購入し、また、長洲の蔣氏秦漢十印齋、広東豊順の丁氏持静斎と盛

氏意園の一部の藏書を買取った。清末民初の時期、多くの藏書家の藏書が散逸していたが、張元済はそれらの藏書を探して集めたりしていた。この方法で張元済は学術価値と版本価値を持つている古籍を数多く集めた。

「求之坊肆」は本屋で古籍を購入する方法である。張元済は新しいところへ行くとき、必ずその本屋を訪ねるという習慣があつて、本屋で商務印書館にない善本古籍を見つけたら大金を惜しまずに購入した。また、古籍を集めるために張元済はかつて自宅の門に「古籍買い取り」という張り紙を張ったことがある。

「近走兩京」は上海だけではなく北京と南京まで足を運んで古籍を求めることである。

「遠馳域外」は中国以外のところへ足を運ぶという意味で、一九二八年の日本訪書のことを指していた。

## (2) 日本訪書の構想

遣唐使が派遣されてから日中<sup>マ</sup>の間で政府と民間とを問わず交流が絶えず行われていた。次第に漢籍は日本に流入し、その中には中国で失伝した珍本も少なくはなかった。特に清朝末期から民国初期にかけて、国情が不安定な状態に

あった。日本の蔵書家はこの機に乗じて、中国の蔵書家の蔵書を買取ったり、本屋街から善本を大量に買い漁ったりしていたのである。

一九二四年に静嘉堂文庫は蔵書リストを公開した。張元濟は静嘉堂文庫に九〇〇種類あまりの漢籍善本が所蔵されていることに驚いた。それは清朝の『四庫全書』より五〇〇〇巻も多く、しかもそのうちの二七七巻はすでに中国で失伝したものであった。『四庫全書』にはそれらの書名は載せられたが、正文を収録できなかったのである。当時、張元濟は『四部叢刊』と『百衲本二十四史』の編集や校正などを行っていたので、多忙な日々を送っていた。一九二六年に商務印書館を退職してからは、漢籍善本を求めることに専念できた。そこで彼は静嘉堂文庫の蔵書をはじめ日本の漢籍を調べようと考えた。この思いはようやく一九二八年に中華学芸社の仲介で実現できたのである。

中華学芸社は一九一六年に東京で留学生によって創立された学術団体で、旧称は丙辰学社であった。一九一八年に北洋軍閥の段祺瑞と日本政府の間で日中軍事協定が調印されたが、これに反対の意を表すべく、留学生たちは学業を中断し帰国したので、学社の活動が中止した。一九二二年

一二月に中華学芸社に改名され、本社は上海に移された。学芸社の発行物である『学芸雑誌』や学芸社で編集された書籍などは商務印書館から出版されることが多かった。また、学芸社の幹部であった鄭貞文、周昌寿、楊端六などは商務印書館編訳所の編集者になったこともあるので、商務印書館と中華学芸社は緊密な関係を持っていた。

中華学芸社東京支社の幹部であった馬宗栄は東京帝国大学で図書館学を専攻しており、学芸社に次のような提案をした。「日本の公私の図書館に宋・元・明・清の書籍が数多く収蔵されている。学芸社の名義で各蔵書家から書籍を借りて内部資料として『中華学芸社輯印古書』シリーズを出版し、それを必要とする学芸社の社員に配布し、発売はしない。日本の学術団体はよくこの方法を利用しているので、私たちはまねしてできるだろう」という案であった。<sup>(7)</sup>

この提案は上海本社で採用され、張元濟も同意し、書籍の借用と撮影の費用を商務印書館は提供することになった。

一方、学芸社の幹部である鄭貞文と馬宗栄は、日本の公立と私立の図書館、個人の蔵書家と交渉し、書籍の借用手続きを行い、影印後、所有者に二〇部贈呈する契約を結ぶことを担当することとなった。その後、日本の内閣文庫、静

嘉堂文庫、東洋文庫などは相次いで協力することを示した。

### (3) 日本訪問

中華学芸社の本社は上海へ移転してからも日本の学界と密接な関係を持っていた。一九二五年一月に日本学術協会が第一回年次大会を開催した際、中華学芸社は一六人の学術視察団を派遣したが、その後も毎回の大会に参加したのである。日本の学者は中国を訪問するとき、よく中華学芸社を訪問し、メンバーたちと交流していた。

一九二八年一〇月一五日中華学芸社は、日本学術協会主催の第四回年次大会に参加するために学術視察団を日本に派遣した。張元済は名誉社員として鄭貞文らと一緒に上海から日本へ出発した。日本に滞在していた一か月半の間に張元済と鄭貞文は、中華学芸社東京支社の幹部であった馬宗栄の案内で日本の公立と私立の図書館を訪問し、それらに所蔵されていた漢籍、特に中国で失伝した漢籍を閲覧することができた。その詳しい内容について張元済は『日本訪書記』に記述した。のちに、張元済は友人の傅増湘が日本に来る際、ガイドブックとして彼に『日本訪書記』を貸している<sup>(8)</sup>。しかし、その後、この冊子は行方不明になって

しまった。そのため、ここでは張元済の息子である張樹年が編集した『張元済年譜』とほかの資料に基づいて、張元済一行の日本訪問の日程を次のようにまとめてみた。

一〇月一七日 長崎に到着し、のち広島へ行った。張元済は「戊辰暮秋與心南同游日本至嚴島」の七絶を作った。宮島の旅館に泊まった。店で杓を買い、店の人は郵送ができると云った。

△ 京都に到着した。内藤湖南と会い、故富岡鉄斎の蔵書を閲覧した。内藤は京都の東福寺に宋本の『中庸説』が所蔵されていると教えてくれた。張元済はこれを影印したいと思う。また、日本に『尚書詳説』『大学説』『論語解』『孝経解』『孟子解拾遺』『標注国語類編』『唐絵唐詩』があれば探してほしいと日本人に頼み、みな探してみると約束した。これに対し、張元済は感激した。

一〇月二四日 東京に到着した。その日の夕方、帝国大学の青年漢学者の長澤規矩也が来た。静嘉堂文庫の函宋楼を案内してほしいと頼んだ。

一〇月二七日 外務省文化事業部部長の岡部長景が歓迎会

を開き、視察団を招待した。張元済は代表として挨拶を述べた。その後、元曲を観賞した。ちょうど韓世昌などが日本で昆曲を公演しており、『思凡』と『春香閣学』を観た。

△ 静嘉堂文庫で甬宋楼を一〇日間見学した。明朝の文淵閣に所蔵されていた明活字本『太平御覧』、宋眉山本『陳書』、元本四三卷本『金華黄先生文集』、明本『欽膳正要』等を閲覧し、借用し撮影する予定であった。文庫長の諸橋轍次は中国を数回訪問したことがあり、張元済と知りあいであった。諸橋氏の案内で岩崎男爵の銅像と墓を拝した。張元済は「戊辰暮秋至日本東京觀靜嘉堂藏書」の詩を作った。

一 一月二三日 日本斯文会の服部宇之吉、宇野哲人、塩谷温が張元済へ手紙を出した。一八日午後五時半に日本橋区檜物町二五号の香蘭亭で開く歓迎会の案内状であった。

△ 宮内省の図書寮で三日間閲覧し、宋本『三國志』、元蜀本『山谷外集詩注』等を見て、撮影する予定であった。内閣文庫で閲覧した。宋本『平齋文集』を拝見した。翟良士の鉄琴銅劍様の藏書では欠巻していた八巻を含

め全部揃っていた。それを撮影し、翟氏の藏書と合わせて印刷する予定であった。

△ 私立の東洋文庫を訪問した。石田幹之助は旧抄の『古文尚書』を見せてくれたが、それはこの世の珍品であった。イギリス人のモリソンは西洋人が書いた東洋についての書籍を集めていたが、倉庫に収めているので、拝見することができなかった。石田に『入唐求法巡礼行記』を一部贈呈した。

△ 東京で個人の藏書を何か所か見学した。前田侯爵の私邸で宋本『世説新語』を拝見した。徳富蘇峰（朝日新聞社社長―この肩書きは張元済の誤解であるが―）の家で古写本の『論語』を数十種類拝見した。実業家の内野五郎三の家で宋残本『宛陵集』を拝見した。中国では失伝した古籍なので、撮影することにした。

△ 帝国大学の図書館を見学した。姉崎正治館長と会談する。旧館は地震で壊れてしまい、新館はまだ建築中なので、所蔵の書籍はすべて箱にしまいこまれているとのこと。張元済らはがっかりして帰った。

△ 漢学家の塩谷温と会い、刊行された先徳文集に詩を添えてくれた。張元済は「和塩谷節山步原韵」を作って

贈った。

△ 張元濟は「贈静嘉堂茹藤田昆一君」、「贈静嘉堂飯田君」（藤田昆一は静嘉堂の執事で、飯田良平は静嘉堂の司庫であった）、「贈内野皎亭（即内野五郎三）」、「贈井田東陽少将」などの詩を作った。

一一月二三日 夜、諸橋轍次などは陶陶亭で張元濟らを招待し、参加者は約二〇人であった。諸橋轍次の日記に「張氏は品性が高尚である学者で長編の詩を作成したことがある」と書いてある。

△ 帰国の途中、京都へ寄り、再び内藤湖南を訪問した。「戊辰初冬過内藤湖南山齋晤談甚歡謹志」を作った。

△ 京都の東福寺の蔵書を拝見し、狩野直喜等の漢学家と会った。

△ 別府の間歇泉を楽しんだ。「別府間歇泉」の詩を作った。

一一月下旬頃 長崎に到着し、帰国の船を待っていた。

一一月三〇日 張元濟は馬宗栄に出した手紙に「各所の古籍を借用し撮影する件について上海へ帰ってから全体的に考えるので、また手紙を送る。静嘉堂から借用する予定の『飲膳正要』はそれほど重要ではないので、

ゆっくりすればいい」と書いた。また、『武経七書』を撮影する際、サイズについて馬宗栄に指示を出した。

一一月一日 長崎で鄭貞文と一緒に乗船した。

一二月二日 上海に到着した。<sup>9)</sup>

日本訪問の事前準備を充分行ったことと、また日本の公私図書館に詳しい馬宗栄に案内してもらい、同時に諸橋轍次、塩谷温、服部宇之吉、長澤規矩也などの漢学家の協力を得た関係で、張元濟の今回の訪問は非常に効率が高かった。わずか一か月半の間に、静嘉堂文庫、宮内省の図書寮、内閣文庫、東洋文庫、東京帝国大学図書館、京都の東福寺蔵書楼などのような東京と京都の公私図書館の漢籍の状況を調べ、さらに中国ですでに失伝された貴重な漢籍を閲覧できた。そして、仮の借用リストを作成し、その後の借用と撮影はこれに基づいて行われたのである。

今回の訪問は張元濟にとって喜びと満足に溢れている旅であった。同行する鄭貞文は滞在中の生活について次のように述べている。「今回の訪問のために、張元濟は半年前から資料を調べたりして、調査旅行や撮影などに十数万円も使った。三か月の間に、<sup>10)</sup>日曜日以外毎日古籍を選び作業

を行っていた。私は張元済と一緒に泊まったが、氏が毎晩夜中までメモをとっていたのを見て、非常に敬服していた。訪問中、長年の悲願であった南宋楼の蔵書を拝見し、中国で失伝した珍本を閲覧した。撮影した古籍のネガ・フィルムを数多く持って帰国したとき、張元済の顔に現れた喜びと安堵した表情にはいまでも感動している」と回想していた。<sup>(11)</sup>

## 二 古籍の借用と撮影および日本人との友情

### (1) 古書の借用と撮影

これまでの先行研究は大体鄭貞文の「我所知道的商務印書館編訳所」に書かれた資料に基づいて行われてきた。そうして出来た通説は以下のようなものである。すなわち、張元済は日本の公立と私立の図書館で撮影した四六種類の珍本のフィルムを持って帰国した。その後、商務印書館の写真部でフィルムは修正や拡大され、中華学芸社の『輯印古書』のシリーズとして出版された。そして古籍の所有者に二〇部を贈呈された以外、内部発行物として学芸社本社と少数の社員に所有されていた、と。

実際には、日本滞在中に図書館見学のみを行ったが、借

用書籍の目録は上海へ帰ってから確定したのである。また、実際の交渉は予想以上に難しかったので、交渉中にまた調整も行った。

帰国する直前の十一月三〇日に、張元済は長崎から馬宗栄に手紙を出して書籍の借用と撮影について「上海へ帰ってから日本の各所より古籍の借用と撮影の件を全体的に計画してからまた手紙を送る。また、静嘉堂文庫から借りる五種類の古籍の中で『飲膳正要』はそれほど重要ではないので、ゆっくりすれば結構である」と書いていた。また、『武経七書』を撮影する際、サイズについて馬宗栄に指示を出した。<sup>(13)</sup>『飲膳正要』と『武経七書』は静嘉堂文庫から借りる古籍であったが、つまり、張元済は帰国する前、撮影しておらず、フィルムを持って帰ったというのは事実ではなかったのである。

張元済は帰国したあと、日本側との交渉をすべて馬宗栄に任せだが、彼は頻繁に手紙を出して交渉の進展を尋ねたり、状況に応じて計画を変更したりして、上海から指示していた。ここでは、彼らの間でやりとりされた手紙に基づいて、<sup>(14)</sup>さらに関連資料を参照し、張元済の代わりに馬宗栄が日本で書籍を借用し撮影する過程を明らかにしたい。

一二月八日に馬宗栄は日本の各図書館との交渉の結果を張元済に次のように報告した。

「静嘉堂の本についてご指示通りに、まず『清明集』と『群経音辨』を撮影してから『陳書』を撮る。『武経七書』の原本のサイズは長澤規矩也に頼んで測つてもらう。

図書寮の本については、東京帝国大学図書館の開館の日に杉寮長がまず宮内大臣に一旦交渉してから、こちらから依頼書を出したほうがいいといった。そうすれば提出したらすぐ許可は下りるので、双方の顔を立てることができると。撮影のリスト中に日本国内では影印したい書籍があるので、再度影印できるかどうかは宮内大臣の意見に従う。

東福寺の本については、『中庸説』を見つけたが、狩野を通して東京で撮影したほうがいいかそれとも直接東福寺より借りたほうがいいのか、教えてほしい。

内閣文庫に手紙を出したが、返事はまだ来ない。諸橋轍次は静嘉堂の本を引き続き撮影し、早く終了するようにといった。

写真家の戸塚氏は多忙なので、撮影開始は一〇日以

後になる。<sup>(15)</sup>

一二月一五日に張元済は馬宗栄に次のような返事を書いた。

この間ご覧になった図書寮の借用目録は一時的なもので、まだ完全なものではない。図書寮長に渡してくれたが、また何種類かの古籍を増やしたので、別紙を同封する。その中でも『三国志』は最も必要であるが、次が『論語注疏』であり、また『北澗外集』の第九卷、第一〇卷（附外集一冊）、『本草衍義』の第一、二、三、四、五卷を追加する。そして宋黄善夫本の『史記』の欠巻があれば必要なので、追加すべきである。以上の古籍はできればうまく商談できるようにして、また長澤先生に協力してもらえように頼んでほしい。その他の古籍はすべて借用できれば最高であるが、許可してくれなかったら仕方がない。

東福寺の本について、寺の僧侶はすでに許可してくれたが、頁数は数十頁しかない。写真家の戸塚氏は現在静嘉堂の書籍を急いで撮影しなければならぬ。それが終わった後また頼むと時間が長すぎるので、東福寺は途中気持ちを変える恐れがある。長尾雨山に頼ん

で先に撮影したほうがいい。

静嘉堂の本をすでに五種類選んだが、後の五種類は数日遅れて決められるわけである。借用した書籍を引き続き撮影し、絶対中断しないようにしてほしい。以前『金華黄先生文集』九巻を借用するつもりであったが、それは十種類の中に入っていない。しかし、諸橋先生はすでに承諾してくれたので、一一頁を追加で撮影してほしい。そして『愧郷録』と『陳古靈先生文集』を数枚ずつ撮影することとなっている。これはかなり細かいので、難しいならばやめてもかまわない。

『冊府元龜』と『太平御覽』の二書は帙数が非常に多く、全部で約一万二七〇〇頁もある。もし両方を借用するといったら諸橋先生はわれわれの欲深さに不快感を示すだろう。こっそりと先生の考えを探ってみてほしい。もし無理なら『冊府元龜』のみを借りて、『太平御覽』を図書寮から借りることにしよう。すべて様子を見ながらやろう。<sup>16)</sup>

この手紙の内容を見れば張元済は帰国後、国内の蔵書状況に合わせて借用目録を修正して完成させたことがわかる。そして手紙に「図書寮撮影リスト」が同封された。その中

に元々撮影する予定の『論語注疏』（宋本）、『三国志』（宋本）、『三谷外集』（元本）、『本草衍義』（宋本）、『北磻外集』（宋本）のほか、『論衡』（宋本）、『集韻』（宋本）、『北磻文集』（宋本）、『世説新語』（宋本）などを追加した。そのほかに欠巻と欠頁を撮影するものとして『史記』（宋黄善夫本）、『愧郷録』（宋本）、『陳古靈先生文集』（宋本）、『金華黄先生文集』（元本）を取り上げた上、具体的な巻数と頁数が記されていた。

のちの話であるが、宋本の『愧郷録』の撮影をめぐっては、このようなエピソードがあった。当時、張元済は『四部叢刊』の続編を計画していた。その中に『愧郷録』を入れる予定であったが、中国国内の蔵書はすべて残本であった。巻一には七頁、八頁、一五頁、一六頁が欠けており、巻五には九頁、一〇頁、一一頁、一二頁が欠けており、巻七には五頁、六頁が欠けており、合わせて一〇頁欠けている。張元済は静嘉堂の甬宋楼蔵書からこの一〇頁を見つけたつもりであったが、しかし、甬宋楼の『愧郷録』も同じようにこの一〇頁が欠けていた。そこで図書寮から『愧郷録』を借りることにした。

一九三〇年春、張元済は上海のある蔵書家のところで

『愧郷録』を見つけた。それは同じく残本であったが、前述した一〇頁はあった。そこで張元済はこの一〇頁を『四部叢刊』の続編に入れたのである。そして、彼はこの一〇頁の写真を静嘉堂に贈呈した。一九九二年に静嘉堂から出版された『静嘉堂文庫宋元版図録』には『愧郷録』のこの一〇頁のことについて「張元済先生より提供」と書いてある<sup>(17)</sup>。これは日中書籍交流史の美談となっている。

前述した張元済の一二月一五日の手紙について、馬宗栄はすぐに返事をしなかった。交渉はまだいい結果が出ていなかったし、馬宗栄は自分の修士論文で忙しかったのである。そこで一九二九年一月三日にやっと返事を出し、交渉と撮影の進み具合を報告した。

図書館の本については、現時点で杉寮長と交渉し、杉寮長から宮内大臣と交渉する段階である。学芸社の手紙はすでに長澤規矩也を通じて杉氏に渡した。この手紙は杉氏個人用だけで、後日、改めて正式な依頼書を作成し宮内大臣に渡すつもりである（もちろん学芸社の名義で）。もし何か制限がある場合、また詳しく報告する。

内閣文庫の本については、前例があるので、影印が可

能である。しかし、正式な依頼書が必要となる。先日、鄭貞文に電報で伝えたが、すぐ学芸社から正式の書類を送ってもらった。（中略）

また、諸橋氏は将来序文と広告を書く際、静嘉堂について言及することがあれば事前に原文を諸橋本人に読ませてほしいといった。日本国内では静嘉堂文庫の本を借用したいところが多かったが、拒絶されていた。国内で誤解を招かないようにするための確認であろう<sup>(18)</sup>。要するに学芸社の名義で借用する際、公式な依頼書が必要となった。しかし、すべては学芸社の名義で借りたわけではなかった。その中で商務印書館と張元済個人の名義で借りた本もあった。一月一日の手紙の中で張元済は次のように書いた。

『愧郷録』と『陳古靈先生文集』は商務印書館によって中国国内で宋本を借りて撮影を行った。ただ数頁が欠けていた。静嘉堂の蔵書を利用してその部分を補う。これらの本は商務印書館の名義で借用するので、将来この二部は学芸社の名義で出版できない。諸橋先生に説明してほしい。もし難しいならやめてもかまわない<sup>(19)</sup>。

馬宗栄への手紙の中で借用や撮影の確認のほかに協力し

てくれた日本人への心遣いまで指示をしていた。静嘉堂文庫長の諸橋轍次が自分の文庫長室を撮影室として提供してくれるという話を聞いた際には、張元済は静嘉堂文庫の近くで空き地を借りて臨時の木造の部屋を建て撮影場所にするようにと馬宗栄に指示し、「長期的に文庫長室を占有するのを避けるべきである。礼儀上においてもよいだろう」と言ったという。<sup>(20)</sup>一方、馬宗栄は各図書館との交渉結果や撮影の進行状況などについて頻繁に張元済に報告していた。

交渉はすべて順調とはいえなかった。元々静嘉堂から『冊府元龜』と『太平御覽』を借りる予定であったが、静嘉堂は『冊府元龜』を許可したものの、『太平御覽』については「希望を叶えなかった」<sup>(21)</sup>。また、撮影中いろいろな困難に直面した。本の折口が破れている場合、また頁と頁の間に紙を挟んでいる場合は頁を広げて撮影できなかった。また、本のサイズは契約の内容と異なる場合があるので、調整するには非常に時間がかかった。撮影作業は「時間ばかりかかって、進度は遅い」<sup>(22)</sup>というように予想以上に大変であった。

図書寮と内閣文庫との交渉はうまく行かず、日本側との交渉をうまく進めるために鄭貞文は学芸社の名義で中国の

駐日公使である汪榮宝と日本内大臣秘書長（内定）の岡部長景に手紙を出して、交渉をうまく進めるために協力を頼んだ。汪榮宝と岡部からは協力するとの返事が来たが、交渉は依然として難航した。

一九二九年二月五日に張元済は馬宗栄への手紙の中に「図書寮と内閣文庫との交渉は難航したが、まったく不能ではなさそうだ。一所懸命に交渉しているし、また岡部が協力してくれるので、うまくいけるかもしれない。図書寮から借りる古籍の中で宋本の『三国志』は最も重要であるので、何とかしてこの本を借用できるようにしてほしい。是非是非」と書いている。<sup>(23)</sup>

図書寮との間で繰り返し交渉した結果、図書寮から借用許可が出たが、制限があった。すなわち一回目の撮影は『論語注疏』と『本草衍義』二種類のみに限定されていた。張元済の最も期待していた『三国志』は一回目のリストに含まれていなかった。張元済はこの結果を知り、二月一日に馬宗栄に電報を打って「図書寮の借用書籍では『三国志』は最も重要であるので、できるだけ一回目にしよう」と指示を出した。翌日、再び電報を打って「『三国志』を『論語注疏』と『本草衍義』の一つと交換し、一回目の借用

にしよう」という妥協策を考えた。<sup>(24)</sup>二月二〇日の手紙にまた借用書籍の交換案を書いたのである。結局、交換案は実現できず、『三國志』は二回目の借用に回された。

ほかの図書館との交渉も順調とはいえなかった。内閣文庫の借用許可は三月末か四月初めになってようやく下りたが、しかし、分割で撮影することとなっていた。<sup>(25)</sup>一方、中国駐日公使汪榮宝は栃木県の足立図書館（足立文庫）と交渉し宋本の『易』、『書』、『詩』との三経注疏を借用するつもりであったが、結局、拒絶された。

撮影の交渉はまだ進行中にもかかわらず、馬宗栄はすでに東京大学の修士課程を修了し、帰国したいと考えていた。彼は張元済に撮影が完成するまであと二年はかかると予測し、東京に二年間滞在するのは無理だという心境を語った。張元済は「更に進学するのがいい。最近、時勢が急に変わって、恐らく近い将来に不慮の事がおこるだろう。急いで帰国するのは最善策ではない」と、馬宗栄を日本に残るように説得した。<sup>(26)</sup>結局、馬宗栄は東京に残り撮影を続けた。馬宗栄は図書館から許可を得てからすぐ日本人写真家を雇い、特殊なカメラで各頁を撮影し、撮ったネガ・フィルムを上海商務印書館へ送った。その後、「中華学芸社輯印

古書」の名義で影印出版することになった。今回日本の各図書館から合わせて四七種類古籍を借用し、その内訳は宮内省図書寮七種、内閣文庫二九種、東洋文庫二種、静嘉堂文庫九種であった。<sup>(27)</sup>各図書館から借りた古籍の書名は表1のとおりである。

表1は「中華学芸社」の名義で図書寮、内閣文庫、東洋文庫、静嘉堂文庫から借りた書籍の目録である。張元済個人の名義か商務印書館の名義で借りた書籍はその中に含まれていなかった。例えば、静嘉堂文庫から借りた『陳古霊先生文集』、『金華黄先生文集』、東福寺から借りた『中庸説』、内野皎亭の家から借りた『宛陵集』などはその範囲外の借用書籍であった。つまりこの中華学芸社の借用書籍のリストは、張元済が日本訪問の成果をすべて反映できたものではなかった。実際には、中華学芸社の名義で借用した書籍を撮影し終えたあと、張元済個人の名義か商務印書館の名義で引き続き借用をしていたのである。上海檔案館に所蔵されている張元済と長澤規矩也や諸橋轍次などとの間で交わされていた書簡によってこれらの事情が明白となった。

以上述べた書簡は一九三五年から一九三八年までのもの

表1 借用書籍一覧表

所 蔵	借用書籍	種類
宮内省図書寮	『論語注疏』(宋本)、『三国志』(宋本)、『三谷外集』(元本)、『太平御覧』(宋本)、 『本草衍義』(宋本)、『北磻文集』(宋本)、『北磻外集』(宋残本)	7種
内閣文庫	『平齋文集』(宋本)、『東萊先生詩集』(宋本)、『晋書列伝』(宋本)、『梅亭先生四 六標準』(宋本)、『東坡集』(宋残本)、『類賓大全集』(宋本)、『全相平話』(元 本)、『古今小説』(明本)、『醒世恒言』(明本)、『拍案驚奇』(二刻)』(明本)、『警 世通言』(明本)、『水滸志』(明本)、『水滸英雄伝』(明本)、『玄雪譜』(明本)、 『唐書演義』(明本)、『国色天香』(明本)、『摘錦奇香』(明本)、『玉谷調簧』(明 本)、『濟顛語録』(明本)、『馮伯玉風月相思小伝』(明本)、『荔鏡記』(明本)、 『孔淑芳双魚墜伝』(明本)、『張生彩鸞燈伝』(明本)、『蘇長公章台柳伝』(明 本)、『八洞天』(明本)、『詞林一枝』(明本)、『八能奏錦』(明本)、『英雄譜』(明 本)、『皇武英明伝』(明本)	29種
東洋文庫	『歴代地理指掌図』(宋本)、『樂善録』(宋本)	2種
静嘉堂文庫	『群經音辯』(影鈔本)、『飲膳正要』(明本)、『册府元龜』(宋残本)、『詩集伝』(宋 本)、『陳書』(宋本)、『新唐書』(宋本)、『歐公本末』(宋本)、『武經七書』(宋 本)、『清明集』(宋残本)	9種

註：鄭貞文「我所知道的商務印書館編訳所」「商務印書館九十年」213頁～215頁(商務印書館、1987年)に基づいて作成した。

で、つまり中華学芸社の名義で古籍を借りて撮影が終わったあとに再び借用する際交わした書簡であった。これらの書簡は上海檔案館に所蔵されているので、張樹年と張人鳳親子は『張元済年譜』を編纂する際、書簡の存在を知らなかった。ゆえに、出版された年譜にこの部分についての説明はなかった。また、これらの事情についてこれまでの先行研究では全く触れられなかった。書簡の公開によって、張元済のその後の借用書籍をめぐる日本人との交流の在り方が明らかになったのである。

公開された資料によって、そのあとの借用活動においては長澤規矩也が中心人物であったことがわかった。手紙の中で彼は張元済に日本の図書館の蔵書の状況や流通の情報などを教えたりしていた。さらに、自ら世話役を務めて日本の図書館との連絡をしていた。一九三五年から一九三七年にかけて長澤規矩也の斡旋で少なくとも七種類の珍本の撮影ができた。静嘉堂文庫から宋本の『周易益公集』、元本の『東京夢華録』、元本の『済生拔萃』の中の『針経節要』、『汲古雲笈』、『針法汲古家珍』、『保嬰集』を借用し、また徳富蘇峰の家から『北磻詩集』を借りた。そして日本人の写真家によって一定の規格とサイズで撮影され、上海に送ら

れ影印されるといふ手順であつた。これは張元済の日本訪問の継続効果といえよう。

張元済の日本訪問の成果は大きかつた。詳しい事前調査や馬宗栄の協力なども成功の要因となつたが、日本の各図書館および下記の日本人の協力は最も重要であつた。岩崎久彌(東洋文庫創立者)、岡部長景(外務省文化事業部長)、服部宇之吉(漢学家)、岩井大慧(東洋文庫長)、杉栄三郎(圖書寮)、鈴木重孝(圖書寮)、樽井清五郎(圖書寮)、秋山謙次郎(内閣文庫)、樋口龍太郎(内閣文庫)、姉崎正治(東京帝国大学図書館長)、宇野哲人(漢学家)、塩谷温(漢学家)、松浦嘉三郎(東福寺)、荻野仲三郎(京都東福寺から『中庸説』の借用許可を得るために、東福寺の寺岡根上人に依頼書を書いた)、岡根守堅(東福寺)、吉川幸次郎(漢学家)、田中慶太郎(文求堂の主人)、諸橋轍次(漢学家)、石田幹之助(東洋文庫)、長澤規矩也(漢学家)、内野皎亭(漢学家)、藤田昆一(静嘉堂)、飯田良平(静嘉堂)、徳富蘇峰(朝日新聞社長)、戸塚正幸(写真家)、内藤湖南(漢学家)、狩野直喜(漢学家)、根津信治(静嘉堂)、長尾楨太郎(元商務印書館の職員)、神田喜一郎(漢学家)等。その中で長澤規矩也、諸橋轍次、内藤湖南は最も協力的で、張元済との友情も最も深かつたの

である。

## (2) 日本人への贈書

日本で撮影され、商務印書館によって影印出版された古籍を、張元済は日本の各図書館と友人に贈書し、礼状を書いて、感謝の気持ちを示した。贈書は次の三つの形式があつた。

### ① 契約贈書

訪日期間中、張元済は馬宗栄に頼んで中華学芸社の名義で長澤規矩也と贈書協議を結んだが、『中華学芸社輯印古書』が出版されてのち借用を認めてくれた各機構と関係者へ贈書するとの内容であつた。本来、贈書の件は中華学芸社が担当するはずであつたが、張元済は、「鄭貞文と馬宗栄は相次いで上海を離れたので、中華学芸社内に責任者がいなくなつた。送り先が漏れてしまう恐れがある」と心配し、すべての贈書は商務印書館から送ることにした。<sup>(28)</sup>

② 直接あるいは間接的に協力してくれた機構および個人への贈書

前述したように張元済の日本訪問および古籍の借用と撮影では契約を交わしていない機構や日本人からも支援を得

たので、そのお礼返しとして贈書することにした。これらの書籍は影印出版の古書に限らなかつたが、当時の日中書籍交流の一側面をうかがうことができる。

表2は①と②の贈書リストで、公開された資料に基づいて整理したものである。張元済の贈書の全体像を反映するには足りないが、これだけでも贈書の数と日本人との交際の広さがうかがわれる。

### ③返贈

張元済は日本の蔵書家や友人からいろいろな本をもらつて、そのお礼として商務印書館の本を返贈した。一方、日本の蔵書家や友人は張元済から贈書をもらつてから彼にまた返贈した。張元済の日本訪問以前にもすでにこのように互いに贈書しあうことは行われていた。しかし、相互の贈書が盛んに行われるようになるのは、やはり一九二八年の訪問がきっかけであつた。一九三六年に吉川幸次郎は『横浦文集』と『詞林紀事』を贈られたあと、『東方学報』を各号ごとに張元済に送る以外に、京都帝国大学が影印した『一神論』、『大唐三蔵法師伝』、『新增漢籍目録』を返贈した。さらに自分の刻書の『周髀算經図注』一冊を送つてもいる。

影印出版において諸橋轍次の協力は非常に大きかつたの

で、張元済は出版した影印の古籍は静嘉堂の原本に限らず一部ずつ諸橋轍次に送つた。そして諸橋轍次は静嘉堂より出版された『唐百家詩選』と『皇朝編年備考』を張元済に返贈した。こういった書籍の返贈は個人の間に限らず、機構の間あるいは個人と機構の間でも行われていた。一九三六年七月一日に張元済は京都帝国大学文学部が影印した『文選集注』第五、六集を届けたが、張元済はすぐに明刊『永楽大典水経注』を返贈した。<sup>29</sup>一九三六年の年末、上海商務印書館東方図書館復興委員会より諸橋轍次にロンドンで開かれた中国芸術国際展覧会の図録が一部送られたが、諸橋轍次の返信に「影印は精美で、中国の芸術の粋はこの書に集められている。玩賞し長期的に珍藏すべきである」と書いてある。<sup>30</sup>

張元済はいろいろな贈書の仕方を探りつつ、日本訪書と古籍の借用撮影にピリオドを打つた。本来なら、このような借用撮影は引き続き行われるはずであつたが、戦争の關係で中断されてしまった。このピリオドには歴史の無情と哀れが含まれていた。

表2 贈書一覧表

贈書先	書籍	贈書理由	出所
宮内省図書寮	『三国志』、『太平御覧』(2部)、『武経七書』、『名公書判清明集』、『樂善録』、『搜神秘覽』、『中庸説』(2部)、『新唐書』	数年前に出版した『百衲本二十四史』の中の『三国志』は図書寮から、『陳書』は静嘉堂から借りて影印したのである。 中華学芸社は図書寮から宋蜀刻本『太平御覧』を借りた。欠巻があるので、京都の東福寺と静嘉堂文庫に欠巻を借りたが、また26巻が欠巻のままであった。景宋聚珍本を補って完成させ、2部を謹呈する。なお『武経七書』、『名公書判清明集』、『樂善録』、『搜神秘覽』等の四種類はすべて日本から借りた古籍であったが、極めて珍本なので、各1部を贈呈する。 『中庸説』は京都の東福寺から借りたが、弊国では長い間ずっと失伝され、今回影印ができて、誠に幸いなことである。	①1936年2月6日の張元済から長澤規矩也への手紙 ②2月20日の張元済から図書寮への手紙 ③8月7日の張元済から図書寮への手紙
静嘉堂文庫	『陳書』、『新唐書』(2部)、『百衲本二十四史』	数年前に出版した『百衲本二十四史』の中の『三国志』は図書寮から、『陳書』は静嘉堂から借りて影印したのである。	①1936年2月6日の張元済から長澤規矩也への手紙 ②1937年4月11日の静嘉堂文庫から張元済への手紙
東洋文庫	『樂善録』	5年前、私は東洋文庫を見学した際、宋本『樂善録』を拝見できた。その後、中華学芸社は借用する許可を願って同意を得た。現在弊印書館によって出版されたので、1部謹呈する。	1936年2月11日の張元済から東洋文庫への手紙
東方文化学院 京都研究所	『四部叢刊』(3編)、『中庸説』、『孟子伝』(5部)		①1936年8月10日の張元済から吉川幸次への手紙 ②9月7日の東方文化学院京都研究所から張元済への返信
宇野哲人	『武経七書』、『清明集』、『樂善録』、『搜神秘覽』、『太平御覧』、『群經音辯』、『欽膳正要』、『東萊先生詩集』、『平齋文集』、『梅亭先生四六標準』、『山谷外集詩注』、『百衲本二十四史』、『中庸説』、『中庸説』(縮小版1部)、『孟子伝』(縮小版1部)、『史記』、『新唐書』	日本の友人たちには珍本書籍の借用に協力していただき、弊印書館によって出版できた。誠に感謝している。 ご協力で、静嘉堂文庫から宋残本『新唐書』を借りた。現在、出版して1部を謹呈する。	①1936年2月10日の張元済から宇野哲人への手紙 ②2月18日の張元済から宇野哲人への手紙 ③8月7日の張元済から宇野哲人への手紙 ④1937年3月24日の張元済から宇野哲人への手紙

諸橋轍次	『武経七書』、『名公書判清明集』、『楽善録』、『搜神秘覧』、『太平御覧』、『百衲本二十四史』、『中庸説』、『中庸説』(縮小版1部)、『孟子伝』(縮小版1部)、『新唐書』	珍本を中華学芸社に貸し影印させていただき、誠に感謝している。弊図書館によって最近『武経七書』と『名公書判清明集』は出版され、この二種類は貴文庫に所蔵されている善本である。また、図書館に所蔵されている宋蜀刻本『太平御覧』に欠巻があるので、貴文庫から欠巻を借用し、補った。そして『楽善録』と『搜神秘覧』はすべて貴国の蔵書家から借りたのである。	①1936年2月18日の張元済から諸橋轍次への手紙 ②8月7日の張元済から諸橋轍次への手紙 ③1937年3月24日の張元済から諸橋轍次への手紙
岩崎久彌	『武経七書』(2部)、『清明集』(2部)、『太平御覧』(2部)、『楽善録』、『搜神秘覧』、『新唐書』(2部)	貴文庫は善本を貸してくださったので、影印と流通ができた。	1936年2月18日の張元済から岩崎久彌への手紙
岩井大慧	『楽善録』	貴文庫は宋本『楽善録』を貸してくださったので、現在弊図書館によって出版できた。1部を郵送して謹呈する。	1936年2月11日の張元済より岩井大慧への手紙。
長澤規矩也	『武経七書』、『名公書判清明集』、『楽善録』、『搜神秘覧』、『太平御覧』、『群経音辯』、『飲膳正要』、『東萊先生詩集』、『平齋文集』、『梅亭先生四六標準』、『山谷外集詩注』、『百衲本二十四史』、『中庸説』、『中庸説』(縮小版1部)、『孟子伝』(縮小版1部)、『公羊单疏』、『史記』、『新唐書』、『濟生拔萃』(4種類)	ご協力を得て黄善夫本『史記』の出版ができた。1部を謹呈する。 以前、弊図書館は元本『濟生拔萃』を影印出版する予定であったが、四種類欠巻であった。代理で静嘉堂文庫から借用し撮影してくださった。ようやく完成し、影印出版できた。1部合計10冊を謹呈する。	①1935年12月20日の張元済から長澤規矩也宛の手紙 ②1936年2月6日の張元済から長澤規矩也宛の手紙 ③12月20日の張元済から長澤規矩也宛の手紙 ④8月7日の張元済から長澤規矩也宛の手紙 ⑤8月31日の張元済から長澤規矩也宛の手紙 ⑥1938年5月4日の張元済から長澤規矩也宛の手紙
狩野直喜	『搜神秘覧』、『太平御覧』、『中庸説』、『中庸説』(縮小版1部)、『孟子伝』(縮小版1部)	ご協力を得て崇蘭館福井氏のところで宋本『搜神秘覧』を借用できた。商務印書館によって影印出版し、広く世に伝わった。そして、『太平御覧』の欠巻の件で東福寺と連絡していただき、欠巻の撮影ができた。	①1936年2月20日の張元済から狩野直喜への手紙 ②8月10日の張元済から狩野直喜への手紙 ③8月16日の狩野直喜から張元済への手紙

長尾雨山	『搜神秘覽』、『太平御覽』、『中庸説』、『中庸説』(縮小版1部)、『孟子伝』(縮小版1部)	以前京都で珍本の『搜神秘覽』、『太平御覽』等の古籍を借用できたが、撮影した際、いろいろお世話になったので、心より感謝している。 ご指導のもとで東福寺に所蔵されていた『中庸説』が影印出版された。	①1936年2月20日の張元濟から長尾雨山への手紙 ②8月8日の張元濟から長尾雨山への手紙
根津信治	『武経七書』、『名公書判清明集』、『太平御覽』、『新唐書』	貴文庫より惜しみなく所蔵している『武経七書』、『名公書判清明集』、『太平御覽』の1部を貸してくださって、現在出版できて広く世に伝わった。 以前貴文庫から宋残本『新唐書』を借用し、影印出版ができた。1部を謹呈する。	①1936年2月20日の張元濟から根津信治への手紙 ②1937年3月24日の張元濟から根津信治への手紙
飯田良平	『武経七書』、『名公書判清明集』、『太平御覽』、『新唐書』	貴文庫より所蔵している『武経七書』、『名公書判清明集』、『太平御覽』の一部を惜しみなく貸してくださって、現在出版できて広く世に伝わった。 以前貴文庫から宋残本『新唐書』を借用し、影印出版ができた。1部を謹呈する。	①1936年2月20日の張元濟から飯田良平への手紙 ②1937年3月24日の張元濟から飯田良平への手紙 ③4月12日の張元濟から飯田良平への手紙
福井氏	『搜神秘覽』(2部)	崇蘭館福井氏のところで宋本『搜神秘覽』を借用して、上海の商務印書館によって影印出版できた。	1936年2月20日の張元濟から狩野直也への手紙
松浦嘉三郎	『搜神秘覽』、『太平御覽』、『中庸説』、『中庸説』(縮小版1部)、『孟子伝』(縮小版1部)	以前貴国から宋刊の『搜神秘覽』と『太平御覽』2書を借用した。代理として写真家に頼んで撮影を完成させた。いまでもご恩を忘れてはいない。 私は5年前、依頼をうけて京都の東福寺で写真家の撮影を監督するために、40日あまりそこに滞在していた。東方文化を発揚する志をもって、善隣の友好のために、報酬をお断りしたのである。しかし、思いもよらなかった上海事変が突然発生し、その影響で貴印書館は半分焼けてしまった。かつて代理として撮影した写真は必ずなくなったであろうと予想したので、非常に残念に思った。そこで官僚らに日本外務文化事業部より再撮影し、文化の損失を補おうと提案したが、実現されなかった。私は命令を奉じて満洲へ赴任するので、撮影の件について結局そのままになった。突然お手紙をいただき、幸い写真は災難から免れられたことを知ることができた。張先生の功勞で古籍は再び世に伝わった。これは不幸中の幸であり、また学界における美談になったであろう。	①1936年2月20日の張元濟から松浦嘉三郎への手紙 ②3月2日の松浦嘉三郎から張元濟への手紙 ③8月6日の張元濟から松浦嘉三郎への手紙 ④8月8日の張元濟から松浦嘉三郎への手紙

岡根守堅	『太平御覧』、『中庸説』、『中庸説』(縮小版1部)、 『孟子伝』(縮小版1部)	東福寺に所蔵されている宋本『太平御覧』を貸して下さった。	①1936年2月20日の張元済から岡根守堅への手紙 ②8月10日の張元済から岡根守堅への手紙
樽井清五郎	『太平御覧』、『中庸説』、『中庸説』(縮小版1部)、 『孟子伝』(縮小版1部)	中華学芸社より図書館に所蔵されていた宋蜀刻本『太平御覧』を借用した。中に欠巻があるので、京都の東福寺と静嘉堂文庫の蔵書より補った。また26巻も欠巻となり、影印宋聚珍本で補って、ようやく復元できた。	①1936年3月4日の張元済から樽井清五郎への手紙 ②8月7日の張元済から樽井清五郎への手紙
鈴木重孝	『太平御覧』、『中庸説』、『中庸説』(縮小版1部)、 『孟子伝』(縮小版1部)	中華学芸社より図書館に所蔵されていた宋蜀刻本『太平御覧』を借用した。中に欠巻があるので、京都の東福寺と静嘉堂文庫の蔵書より補った。さらに喜多邨直寛氏の影印宋聚珍本で補い、ようやく復元できた。	①1936年3月4日の張元済から鈴木重孝への手紙 ②8月7日の張元済から鈴木重孝への手紙
杉栄三郎	『太平御覧』	中華学芸社より図書館に所蔵されていた宋蜀刻本『太平御覧』を借用した。中に欠巻があるので、京都の東福寺と静嘉堂文庫の蔵書より補った。さらに喜多邨直寛氏の影印宋聚珍本で補い、ようやく復元できた。	1936年3月4日の張元済から杉栄三郎への手紙
石田幹之助	『楽善録』	中華学芸社より貴文庫の宋本『楽善録』を借用した。現在商務印書館によって影印出版したので、1部を郵送で謹呈する。	1936年3月13日の張元済から石田幹之助への手紙
荻野伸三郎	『中庸説』、『孟子伝』	かつて友人の山本条太郎の宴会でお話をお伺いしたことがある。そして京都の東福寺の岡根上人へお手紙を出し、そこで所蔵されていた『中庸説』を借用するのを依頼して下さった。『孟子伝』は残本であったが、宋から現在まで再版されたことはない。『中庸説』と同時に出版したので、1部ずつを謹呈する。	①1936年8月6日の張元済から荻野伸三郎への手紙 ②8月8日の張元済から荻野伸三郎への手紙 ③10月3日の荻野伸三郎から張元済への手紙
吉川幸次郎	『横浦文集』、『詞林紀事』、『中庸説』、『孟子伝』	『中庸説』と『孟子伝』が出版できたので、1部ずつを謹呈する。	①1936年5月8日の張元済から吉川幸次郎への手紙 ②5月22日の吉川幸次郎から張元済への手紙 ③8月10日の張元済から吉川幸次郎への手紙 ④9月4日の吉川幸次郎から張元済への手紙

澤村幸夫	『中庸説』、『孟子伝』	『中庸説』と『孟子伝』が出版できたので、1部ずつを謹呈する。	1936年8月10日の張元済から澤村幸夫への手紙
服部宇之吉	『中庸説』、『孟子伝』	『中庸説』と『孟子伝』が出版できたので、1部ずつを謹呈する。	①1936年8月10日の張元済から服部宇之吉への手紙 ②9月1日の服部宇之吉から張元済への手紙
徳富蘇峰	『中庸説』、『孟子伝』、『史記』	5年前に徳富先生に頼んで、上杉伯爵のところから黄善夫本『史記』60巻を借りた。商務印書館によって影印出版ができて世に広く伝わった。中国で長い間失伝されていた古籍が復元できた。時間がだいぶ経ったが、全書を印刷できたので、1部を謹呈する。	①1936年10月2日の張元済から徳富蘇峰への手紙 ②11月26日の張元済から徳富蘇峰への手紙
黒井悌次郎	『史記』	5年前に商務印書館は宋刊黄善夫本の『史記』を影印する際、60巻が欠巻となった。代理で上杉伯爵邸より借用し、復元できた。時間がだいぶ経ったが、全書を印刷できたので、1部を謹呈する。	①1936年11月27日の張元済から黒井悌次郎への手紙 ②11月28日の張元済から黒井悌次郎への手紙
上杉伯爵	『史記』(2部)	商務印書館は宋刊黄善夫本の『史記』を影印する際、半分欠けていた。徳富蘇峰、黒井悌次郎先生に頼んで借用した。	①1936年11月27日の張元済から上杉伯爵への手紙 ②1937年1月6日の商務印書館から田中慶太郎への手紙
塩谷温	『中庸説』、『孟子伝』	『中庸説』と『孟子伝』を出版できたので、1部ずつを謹呈する。	1936年11月26日の張元済から塩谷温への手紙

註：贈書一覧表は上海檔案館編『上海檔案史研究』の第5、6輯に公開された『張元済往来書札之二』と『張元済往来書札之三』によって編成した。

### 三 張元済の日本訪書の意義

— 版本の価値と民族記憶の再生 —

中国文化人の日本訪書は張元済の来日以前にも以後にも行われている。一八八〇年に来日した楊守敬は駐日公使館の書記官として四年間日本に滞在し、古籍の収集に専念した。その後、董康は一九〇二年から合計八回日本訪書を行った。

張元済のあとには、傅增湘、孫楷第、王古魯などが日本で古籍や小説や劇曲の書籍を調べた。これらの人々はそれぞれ成果をあげている。しかし、中国文化人の日本訪書の歴史において一九二八年の張元済の日本訪書は特別な意義を持っている。わずか一か月半しか滞在できなかつたにもかかわらず、訪問先の数、目を通した善本の数、借用撮影の数、出版後の影響などの面から見て張元済の訪書は前述した人たちよりはるかに質が高いものであった。

張元済が書いた『日本訪書記』は行方不明になつたので、日本訪書の具体的な過程や詳細な内容は確認できなくなつた。しかし、日本の各図書館から借りた古籍の撮影・出版状況は比較的明確である。前述したように商務印書館と中

華学芸社は協議に基づいて「中華学芸社輯印古書」の名義で商務印書館から出版するという形式で進行していたが、「損益と関係なく、各古書が出版されてから数部を中華学芸社に贈る」という約束であつた。<sup>31)</sup>

鄭貞文の回想によると「中華学芸社輯印古書」の名義で出版された本は四六種類であつたが、実際はその数より多かつた。鄭貞文の四六種類には函書寮から借りた『北磻文集』が漏れている。そして最近の研究によると、『曼殊留影』（宋本）、『梅宛陵集』（宋残本）、『大唐西域求法高僧伝』（宋本）の三種類も遺漏のなかに含まれている。実際には合計五〇種類の古籍が影印及び出版されたのである。<sup>32)</sup>

張元済個人の名義あるいは商務印書館の名義で借用した古籍は前述の五〇種類には含まれていない。これらを加えると、少なくとも六〇種類に上る。

これらの古籍はほとんど中国で失伝されたり、目録だけ残つたり、残本となつたりしていたものであるが、ようやく復元できるようになつた。張元済が残している各書の跋には古籍復元を論じて喜んでいた気持ち溢れていた。例えば、元本『金華黄先生文集』（四三卷）は甯宋楼旧蔵書とともに日本へ流失したあと、中国で失伝となつた。『四部

叢刊』の初編は、元本を見つけれなかったもので、影写本のものであった。一九二六年に再版したとき、常熟の瞿氏、上元宗氏に所蔵されていた残本を借用しても、合わせてわずか三一巻であった。一九二八年に張元済は靜嘉堂を訪問した際、全巻を見ることができた。「欠巻の部分を知らせ影印の許可を得た。これで復元できた」と張元済は述べていた。<sup>(33)</sup>

また宋本『太平御覽』は全一〇〇巻で、国内に所蔵されているのは残本ばかりであった。張元済は凶書寮と京都の東福寺で宋蜀刻本の残本を見つけて、借用した。合わせて目録一五巻と本書九四五巻となった。また靜嘉堂文庫から建寧本を借用し、巻四二〜六一、巻一一七〜一二五、合計二九巻を補った。残っている二六巻は喜多邨直寛の聚珍本で補った。これについては「最も早期に最高の版本でこの夥しい古籍を復元させた。元の形に復元できたので、重要な文献価値と版本価値をもっている」と評価されている。<sup>(34)</sup>

「本の最初の版本が最も貴い」というのは張元済の主張であった。一九二六年に退職してから、張元済は中国古籍善本の修復事業に力を尽くした。日本から影印した古籍はその後、彼の編纂した大型古籍叢書に編入された。『金華

黄先生文集』（元本）、『群經音辯』（影印宋鈔本）、『欽定正要』（明本）、『山谷外集詩注』（元本）、『東萊先生詩集』（宋本）、『平齋文集』（影印宋鈔本）、『梅先生四六標準』（宋本）、『中庸說』（宋殘本）、『太平御覽』（宋本と日本聚珍本宋本と日本聚珍本）等の九種類は『四部叢刊』の初編、続編、三編に編入された。『史記』（宋黃善夫本）、『三國志』（宋紹興刻本）、『晉書』（宋本）、『陳書』（宋蜀刻大字本）、『新唐書』（宋殘本）等の四種類は国内の蔵本と合わせて『百衲本二十四史』に編入された。『樂善錄』（宋紹定本）、『名公書判清明集』（宋本）、『武經七書』（宋本）、『搜神秘覽』（宋本）、『中庸說』（宋殘本）等の五種類は『統古逸叢書』に編入された。そのほかに一部の古籍は叢書に編入する予定であった。例えば『冊府元龜』（宋本）は『四部叢刊』の四編に編入し、『歴代地理指掌圖』（宋本）を『統古逸叢書』に編入する予定であったが、戦争のために中断されたのである。これらの中国で失伝された古籍の編入によって数百年も域外に流布されていた古籍は帰郷し、改めて中華民族の歴史と記憶に入った。その意義は単なる版本の価値にのみあるのではない。最も重要なのは民族記憶の再生と民族精神の再構築に  
関わるものであったところにある。

一八八四年に楊守敬が大量の漢籍を積んで船で帰国した際、日本国内で議論が起こった。一方、一九〇六年に甬宋樓が日本人に購入されたとき、多くの中国文化人は憤慨していた。一九〇七年に董康が日本漢文学者の島田翰の『甬宋樓藏書流源考』を刊刻する際、「題識」の中に「甬宋樓藏書は散逸されなくても海外へ流失してしまうぐらいなら、むしろ焼けてしまったほうがまし。焼けてしまったらその魂はずっと古都を守ってくれる」と書いていた。<sup>(35)</sup> これらの考えに対し、日本の学者であった神田喜一郎は次のように述べていた。「もし日中の立場が変わったら我々も同じような感慨であるに間違いはない。この気持ちを理解できないわけではない。両国学者はいつもこの二つのことを比較し、損得を絶えず論議する。しかし、彼らは損得より日中文化交流に貢献した立場からこの問題を考えるべきである。それは軽視できない事実である」<sup>(36)</sup>。張元済の日本訪書について同じように考えるべきだということである。

(1) 多数の先行研究の中で代表的なのは大庭脩の『江戸時代における唐船持渡書の研究』(関西大学東西学術研究所、一九六七年)、嚴紹盪の『漢籍在日本の流布研究』(江蘇古籍出版社、一九九二年)がある。前者は江戸時

代における漢籍の輸入および日本への影響を系統的に論じるもので、後者は漢籍が日本に輸入された歴史とその流布の概況を全面的に考察したものである。

(2) 当時、日本で中国の書籍を取り扱う書店は東京の文求堂以外に、岸田吟香が東京で経営していた林擁書城、本店が大阪にある青木高高堂などがある。これらの書店は主に上海から新漢籍を輸入していた。大阪に鹿田氏が経営していた松雲堂があり、漢籍と和書を取り扱う書店であった。元々は北京から古籍を輸入していたが、のち上海から輸入した新漢籍を販売するようになった。松雲堂により創刊された『古典聚目』(前称『書籍月報』)の「号外版」に北京から輸入した古籍目録および上海から輸入した新漢籍目録が掲載されていた。錢婉約、宋炎輯訳『日本学人中国訪書記』(中華書局、二〇〇六年)の「緒論」二五―二六頁を参照。

(3) 単著は王紹曾『近代出版家張元済(增訂本)』(商務印書館、一九八四年)、葉寧曼瑛著、張人鳳、邹振環訳『從翰林到出版家——張元済の生平與事業』(商務印書館、一九九二年)、張樹年編『張元済年譜』(商務印書館、一九九一年)、吳方『仁智の山水 張元済伝』(上海文芸出版社、一九九四年)、周武『張元済 書卷人生』(上海教育出版社、一九九九年)。代表的な論文は、陳東輝「張元済與中日文化交流」(『近代史研究』一九九四年第二期)、王国忠「中日出版交流史的華頁——張元済日本訪書述評——」(『出版與印刷』一九九四年第二期)がある。

- (4) 張元済が編集した『馬継華君來往書件（日本借書事）』原稿（一冊）が張元済の孫である張人鳳によって整理され、『張元済全集』第一卷（商務印書館、二〇〇七年）に収録されている。また、上海檔案館に所蔵されている張元済と国内、海外の文人の間で交わした書簡（三卷、檔案番号Q四五九一—一五五、一五六、一五七）が整理され、『上海檔案史研究』（上海檔案館編纂、上海三聯書店出版）の第三輯（二〇〇七年八月）、第五輯（二〇〇八年一月）、第六輯（二〇〇九年三月）に掲載されている。これらの書簡の中に服部宇之吉、狩野直喜、岩井大慧、宇野哲人、吉川幸次郎、諸橋轍次、長澤規矩也、松浦嘉三郎、鈴木重孝などの日本人が張元済と商務印書館への手紙が含まれている。
- (5) 張元済は自分が版本目錄学に造詣が深いという自信を持っていた。彼は「平素は版本学の第二人だと思われたくない。上海は善本の集まりの北京から遠いので、傳増湘（清末民初の蔵書家、政治家）より少々劣るかも知れない」と言った。王雲五『涉園序跋集録』跋「張元済『涉園序跋集録』（台湾商務印書館、一九七九年）二八〇頁。
- (6) 張元済『題朱遂翔抱經堂藏書圖』『張元済詩文』（商務印書館、一九八六年）八二頁。
- (7) 鄭貞文「我所知道的商務印書館編訳所」（『商務印書館九十年』商務印書館、一九八七年）二一〇頁。
- (8) 張元済、傳増湘『張元済傳増湘論書尺牘』の中に「日本訪書記」が数回も登場した（『商務印書館、一九八三年、二一〇—二一二頁）。
- (9) 張樹年編『張元済年譜』（商務印書館、一九九一年）三一—三三三頁。
- (10) 鄭貞文「我所知道的商務印書館編訳所」（『商務印書館九十年』商務印書館、一九八七年）二一七頁。作者が覚え間違っており、正確な滞在期間は一月半であった。
- (11) 鄭貞文「我所知道的商務印書館編訳所」（『商務印書館九十年』商務印書館、一九八七年）二一七頁。
- (12) 張樹年編『張元済年譜』（商務印書館、一九九一年）三一頁—三三三頁。
- (13) 張人鳳編『張元済全集』第一卷（商務印書館、二〇〇七年）一七二頁。
- (14) 張元済は馬宗栄との間での手紙を整理し『馬継華君來往書件（日本借書事）』という稿本を編集した。しかし、この稿本は現在第一冊のみ残っているが、一九二八年一月三〇日から一九二九年四月四日までの手紙で、ほかの部分は紛失された。この一冊の稿本は張元済の孫である張人鳳によって整理され、『張元済全集』第一卷の一七二—一八八頁に収録されている（『商務印書館、二〇〇七年』注（4）を参照）。
- (15・16) 張人鳳編『張元済全集』第一卷（商務印書館、二〇〇七年）一七二頁。
- (17) 張建智「宋版『愧郊録』與張元済—靜嘉堂讀書札記之五」『文滙讀書周報』二〇〇七年九月二八日を参照。

- (18) 張人鳳編『張元濟全集』第一卷（商務印書館、二〇〇七年）一七五～一七六頁。
- (19) 同右、一七七頁。
- (20) 同右、一七六～一七七頁。
- (21) 同右、一七五頁。
- (22) 同右、一七九頁。
- (23) 同右、八二頁。
- (24) 張樹年編『張元濟年譜』（商務印書館、一九九一年）三二〇頁。
- (25) 同右、三一八頁。
- (26) 張人鳳編『張元濟全集』第一卷（商務印書館、二〇〇七年）一八六頁。
- (27) 鄭貞文の文章に四六種取り上げられているが、図書寮の『北磻外集』（宋残本）が漏れた。一九三〇年六月二六日の張元濟より傅增函宛の手紙に付け加えた「日本図書寮、内閣文庫、静嘉堂、東洋文庫借用リスト」によって追加したのである。張元濟、傅增湘『張元濟傅增湘論書尺牘』（商務印書館、一九八三年）一三二六頁を参照。
- (28) 陳正卿、彭曉亮整理『張元濟往來書札之二』上海檔案館編『上海檔案史研究』（第五輯）（上海三聯書店出版、二〇〇八年一月）二二三頁。
- (29) 同右、二二二～二二三頁。
- (30) 同右（第六輯）（上海三聯書店出版、二〇〇九年三月）三一九頁。
- (31) 張元濟、傅增湘『張元濟傅增湘論書尺牘』（商務印書館、一九八三年）二二三頁。
- (32) 歐陽亮「中華学芸社研究」（華東師範大学二〇〇四年修士論文、三六頁、未刊行）。
- (33) 張元濟「元刊本『金華黃先生文集』札記」（『張元濟古籍書目序跋匯編』下冊、商務印書館、二〇〇三年）八七〇～八七一頁。
- (34) 王紹曾『近代出版家張元濟（增訂本）』（商務印書館、一九九五年）九五頁。
- (35) 董康「刻印宋樓藏書流源考題識」（『澹生堂藏書約（外八種）』上海古籍出版社、二〇〇五年）三八頁。
- (36) 神田喜一郎「中国書籍記事」（錢婉約、宋炎輯訳『日本学人中国訪書記』中華書局、二〇〇六年）。

（しゅうぶ） ぶ・上海社会科学院教授、華東師範大学兼任教授

（訳／えん） りつ・大阪経済大学経済学部准教授